

(2) 明日から始められる！実践優先のカリキュラムと指導法

「子どもたちの未来に何を残すか？」という問いに答えるための、実践的な新基準として、大規模な改革や特別な予算を必要とせず、既存の教育活動に小さな工夫を加えることで、非認知能力を育成し、子どもたちが未来を生き抜く力を獲得できる指針や教育法の推進していきます。

① カリキュラム：既存の授業に「未来の問い」を組み込む

授業冒頭に未来を意識した問いを投げかけ、学びを社会と結びつけることで、子どもの探究心と持続可能な未来を創る力を形成し、さらに自ら考え行動し社会に貢献する力も養うことが十分に可能であり、継続的发展も促進されていきます。

ア 単元のはじめに「未来への問い」を

この実践は、知識を単なる記憶ではなく未来を切り拓く手段と捉え直すための基盤的アプローチです。

説 明：学習冒頭、この学びは将来どんな課題解決に役立つか？と問いかける。 ねらい：知識の活用場面を意識させ、学びを未来志向に転換する。 未来に残す力：課題発見力と長期的な思考習慣を培う。

イ 探究型の時間を確保

この取り組みは、子どもの主体的学びを保障し、自ら問いを立て解を探す力を涵養するために不可欠です。

説 明：週1回、教科横断の自由探究を行い、テーマを発表する。 ねらい：主体的学びを促進し、好奇心を深める。 未来に残す力：自己管理力と創造性を基盤とする探究心を残す。

ウ 失敗を学びの資源にする

この実践は、失敗を消極的要素とせず、挑戦の原動力と捉え直す教育の価値を示すものです。

説 明：挑戦の場で「失敗してもOK」とする評価ルールを導入する。 ねらい：失敗を恐れず挑戦する態度を保障する。 未来に残す力：逆境に耐え、立ち直るレジリエンスを残す。

エ 10年後を見据えたプロジェクト学習

この取り組みは、子どもに長期的視野を与え、社会の担い手としての責任を意識化させる実践です。

説 明：地域や社会課題を題材に「10年後の解決策」を構想する活動を行う。 ねらい：未来予測と長期的な視野を身につけさせる。 未来に残す力：持続可能な社会を築く創造力と実践力を残す。
--

② 指導法：言葉と行動で「心の羅針盤」を磨く

日々の指導場面で未来の問いを重ね、子どもが感情や思考を自覚し、他者と共に共働し、歩む力を育成していきます。

ア 「なぜ？」を問いかける指導

この実践は、思考の背景を言語化させ、批判的かつ創造的な思考の深化を促す基盤です。

説 明：答えに「なぜそう思ったの？」と返し、考えを深めさせる。

ねらい：思考過程の自覚を促し、多様な視点を涵養する。

未来に残す力：メタ認知力を残し、論理的対話を可能にする。

イ 「心の天気予報」の共有

この実践は、感情の認識と制御を日常的に行う習慣を形成し、心の安定を学級全体で共有する基盤です。

説 明：朝の会で気分や心情を言葉にして共有する。

ねらい：感情の把握と調整を習慣化する。

未来に残す力：セルフコントロールと共感性を残す。

ウ 「ナイスチャレンジ！」を称賛

この実践は、努力や挑戦を可視化し、成果主義を超えた学びの価値を示すものです。

説 明：挑戦や仲間を支える行為を具体的に褒める。

ねらい：挑戦意欲と自己肯定感を高める。

未来に残す力：自信と挑戦を楽しむ姿勢を残す。

エ 未来を語る対話の時間

この実践は、子どもが自ら未来像を言語化し、長期的ビジョンを具体化する営みです。

説 明：週1回、教師と子どもが「10年後どうなりたいか」を自由に語る。

ねらい：自己像の構築と将来設計を支援する。

未来に残す力：自己実現を見据えた長期的ビジョン力を残す。

③ 地域・保護者との連携バージョン

家庭や地域と連携し、子どもの非認知能力を育む実践を学校外にも広げ、学びを社会で活かす力を形成する柱です。

○ 保護者像の具現化（理想の関わり方を具体化し共有）

子どもと保護者がどのように学びや挑戦を支え合うかを明確化し、家庭での成長支援につなげる。

○ 地域プロジェクト参加（地域課題に挑戦する体験活動）

社会の中で協働・創造する力を育み、持続可能な未来を考える力を残す。